
農業しながら平和に生きたい

白：休止中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

農業しながら平和に生きたい

【Nコード】

N6073U

【作者名】

白：休止中

【あらすじ】

ハンターハンターの世界に転生。テンプレ。皆様の作品に影響され書いてみました。

プロローグ

0話 プロローグ

こんにちは俺の名前は鈴木^{すずき} 涼^{りょう}と言う。
現在18歳。大学生だ。
農業系の大学に通いながら牛丼屋でバイトしている。

俺は今日バイト帰り、銀行に給料を預けにいったら強盗に刺された。
そして、気がつくと思つ白な空間に全裸で放置されていた。
少しすると白い爺さんが現れ俺を凝視し始めた。

そして今に至る。

「回想は終わったかね？」

「ええ。まあだいたい」

本当は何が起こったのかすべて理解している。
俺は死んだ。この爺さんは神様だ。

「どうしたい？」

「いや、どうしたいと言われましても・・・」

「いやいや、俺が生き返りたい！って言ったら生き返られてくれるのかよ！？」

「それは無理じゃ」

「ですよね」

「珍しいのう。今までの奴らは漫画やアニメの世界に記憶を持ったままチート能力付で転生したいと土下座してくるか、ワシに殴りかかってくるかだったのに、」

「極端ですね」

あんた一体どんな人間管理してんだよ。

「オタク、廃人、ニート、犯罪者、ダメ人間じゃ」

「心読まないでくださいよ！　って俺もそのカテゴリに入るんですか？かなりショックですよ！」

ショックだ！これでもある程度まともに生きていたのに！！

「嘘をつくな。じゃが芋と牛と馬しか友達のない可愛そうな人間
だろうお前は！」

「それ以外にもいますよ！ 失礼な！！」

まったく・・・俺は友達いっぱいいるんだぞ！

「誰じゃ？ 言ってみろ」

「・・・トラクターとか？」

神様が暖かい目をして俺を見つめてくる。

らめえーそんな目でみないでえー

「今神の間ではお主のような輩を校正させるため異世界に記憶を持
ったまま転生させることがはやっておる。お主も被害者だ。ワシら
がもつと世界をきちんと創っていれば・・・」

「やめてください！ それだと俺が本気で可愛そうな人みたいじゃ
ないですか！」

辛い、辛すぎる！ 俺のライフはもうゼロよ。

「では逝って来い」

「そのボケは使い古されていゝゝゝ、

神様に突っ込むまえに俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

ボケが古すぎた・・・

編集しました。

。を消したり、？や！の後にスペースを入れたり

「話」「やめて！触らないで」薔薇

「話」「やめて！触らないで」薔薇

こんにちは鈴木 涼だ。現在三歳。

俺はあの後、気がつくと赤ん坊になっていた。

神よ人の話は最後まで聞けよ！

しかも赤ん坊スタートは辛すぎる。

少しは気を利かせて三歳からとかにしてもらいたかった。
羞恥プレイを一年間も続けるのはかなり辛い。

ただ幸運なことがひとつあった。

家が農家なのだ！

おもにブドウを作って、加工してワインにし販売している。

あと、少数だが豚と馬がいる。

しかもわが家で作っているワインは高級品らしく、それなりに裕福だ。

この点は神様に感謝している。

二歳からは馬に乗せてもらったりもしていた（もちろん両親同伴）

毎日

起床〓>ご飯〓>絵本（文字の勉強）〓>ご飯〓>農場で土いじり
〓>ご飯〓>睡眠

俺はこんな素晴らしい生活を送っていた。

しかし、不運なことがひとつあった。

どうやら此処はハンターハンターの世界みたいだ。

両親がハンターに獣の討伐を依頼できないか？と言う話をしていたのを耳にしたのだ。

残念すぎる。俺の「農業しながら、平和に暮らす」が不可能になっ
てしまったのだ

なぜかって？

この世界には素手で地面にクレーターを作ったり、念能力というチート能力が存在するんだぜ！

無理だろ！

神。俺を殺す気だろ、、

が、俺はあることを思いついた。

「俺が強くなればいいんじゃない？」

逆転の発想？ だった。

この世界では十歳児が岩を持ち上げたり、人を殺したりしてるんだ。努力すれば俺でも・・・と。

なので、現在俺は毎日、腹筋百回・背筋百回・腕立て伏せ二百回・走り込み十キロをしています。

まあ、これだけでもすごいんだけどね。
前世の世界では考えられないことだしな。多分テレビとか出れるレベルだ。

念能力とか使えればいいんだけど、原作あんまり覚えていないから練習の仕方や使い方がわからない。ネットカフェで一度読んだきりだし。

原作知識も同様であんまり覚えていない。

でも俺はまだ三歳。なんとかなる、ゝゝ、よな？

「話」やめて！触らないで」薔薇（後書き）

どうやってオリ主に力をつけさせるかな？
使わせる念能力は決まっているのに・・・

二話「俺に触れると火傷するぜ！」アイロン

二話「俺に触れると火傷するぜ！」アイロン

やあ、転生者の元鈴木 涼だ。

俺はもう五歳になっていた。この二年間色々なことがあったが、ある事情で省略させてもらう。

・・・理由は聞かないでください、、

べ、べつに毎日ゴロゴロしていたわけじゃないんだからね！

「リョウ、行くわよ」

「今行くよ。母さん」

おっと飯の時間だ話はこのまでにしよう。

あ、実は神様に感謝することがもう一つあったんだ。

俺の今の名前なんだが

リヨウ＝スーズキ

なんだ。苗字の方は微妙だが名前が一緒なのはかなり嬉しい。

が、今の両親を本当の両親と思うことは正直難しい。

心のどこかで此処は漫画の世界なんだと思ってしまうている。

まあ、俺は植物があればどんな世界でもいいけどな！

植物農産物牛馬鶏豚肥料人参じゃが芋大根牛蒡胡瓜西瓜葡萄薩摩芋・

は！トリップしてしまった、、
いかん、いかん。

おっとそろそろ行かなければ。

どこにつて？

ふふ、実は俺は今日から「心源流拳法」を習うのだ！

母に「俺、武術やりたい！強くなりたい！」と青少年な目つきでお

願いしたところ快く承諾してくれた。運良く近くに心源流拳法の道場があったので今日からそこへ通うにのだ。

それでは道場へレッツゴー!!

「今日から入門するリョウウ」スーズキイです。よろしく願いします！」

パチパチパチ。二十人位の子供たちが俺を凝視している。最初の印象が肝心だからな、真面目な好青年を演じたんだが、、何か失敗したかな？

「礼儀正しい子だね。ではまずこの道場恒例「実力診断歓迎試合」をしようかな」

実力診断歓迎試合？嫌な予感しかないぞ。

「では、子供の部ナンバーワンのミソラちゃん前へ」

ナンバーワン！？見た目六歳くらいだぞ。子供の部には十歳児もいるはずだが？
どんだけ強いんだよ。

危険じゃないのかよ、、

「リョウ君は僕の勘ではかなり強いと思うんだけどなあ」

笑ってんじゃねえよ！
毎日体力・筋力作りはしてるけど武術は素人ですよ。
勝てるわけがない。

先生の合図で僕とミソラちゃんの試合が始まった。

ミソラちゃんは開始早々俺に本気の正拳突きを打ってきた。

慌てて体を右に傾け避ける。

何とか回避成功。

あれ？ミソラちゃんが驚いた顔してるぞ。

「やりますね」

いやいや。ただ避けただけじゃん。

ミソラちゃんは蹴り、フェイント、裏拳、を織り交ぜて攻撃してきた。

超恐い。一発一発がすごい威力だ。
当たったら痛いだろうなあ

試合開始から三分ほど経過した。

・・・なぜかミソラちゃんの顔には笑みが浮かんでいる。
怖い。恐すぎる、、

そろそろ僕の体力も限界だ。

こうなったら、、得意じゃないが攻めにでるか

「
ティヤアア」

見事に見切られ腹に正＋拳が入る。

俺は口から何かを吐き出した後、意識を失った。

「二話「俺に触れると火傷するぜ！」アイロン（後書き）」

M・U・Z・U・K・A・S・I・I!

三話「私に全てを注いで！」コップ

三話「私に全てを注いで！」コップ

目が覚めると、見知らぬ部屋に寝かされていた。
どこだここは？俺は一体何をしてたんだっけ？

「痛い」

腹部に強い痛みがはしる。

「気がついたかな？ リョウ君」

あれこの人は、、
！そうだ。俺は心源流拳法を習いに来て実力診断歓迎試合をつけて

ミソラって子と戦ってぶっ倒れたんだ！

「腹部の方は大丈夫かな？ ミソラちゃん本気で突いたって言うていたけど」

やっぱりな。

でも、六歳児であの威力はすげえな。

「大丈夫ですよ。全然平気です」

こう答えると先生は顔をしかめた。

「・・・ミソラちゃんの全力の正拳突きは全長三メートルの岩を粉々にするんだけどな」

え！？

そんなの受けて俺大丈夫なの？

臓器とか粉々じゃないの普通！？

「俺は大丈夫なんですかね？」

不安だ。

まさか道場入門一日目で死亡とか
ミイラ取りがミイラになってるよ・・・

「医者は問題ないと言っていたが、常識的に考えてミソラちゃんの
正拳突きを五歳の君が耐え切れるはずがない。それに君は五歳児に
しては礼儀が良すぎる」

しまった！

普通の五歳児はあんなに礼儀正しくないよね。

じゃあミソラちゃんも規格外じゃないのか？

あの歳であんなにしっかりしてるし、正拳突きで岩を粉々つて、、

「ミソラちゃんに悪気はなかったんだ。あの子は他の子供とは比べ物にならないほど強く賢い。そのせいで周りから浮いてしまったんだ。同年代の子は彼女を避けて、大人たちは化け物を見るような目で見ていた。ただどんなに強く賢くても心は六歳の女の子。そんな周りの対応に心は限界だったんだ」

そうか、ミソラちゃんも苦勞してるんだな。

確かに前世で岩を粉々にする六歳児がいたら恐いだろうな。

「そんな時、君が来た。五歳児なのにやけに礼儀正しい君が。それに君から感じる気迫はかなりのものだったから、もしかしたら君もミソラちゃん並に強いんじゃないか？ と思っただけ。この道場の風習を利用して確かめさせてもらったんだ」

いやいや。それでもし俺がただの五歳児だったら危険だったよ。ミソラちゃん本気の正拳突き放ってきたし。

「一応、ミソラちゃんには「手加減して一発で沈めるように」といっておいたんだけど」

おい！

注文のしかたが間違ってるぞ。

普通は「手加減して怪我させないように」だろ。

「でもさ、君はミソラちゃんの攻撃を避けたんだよ。この道場でも避けられるのは、大人でもほんの一握りなんだ。ミソラちゃんはこの時かなり嬉しかったらしいんだ。自分と同じ位の歳の子が自分の攻撃を避けることなんて今までなかったらしいからね。そのせいで手加減を忘れてフェイントも織り交ぜていったんだ」

急に腕に込める力が増えたり、
フェイントや裏拳や足蹴りが追加されたと思ったら
そのせいだったのか。

「しかも、君はそれすらも避けていた。ミソラちゃんの全力を避けるのはこの道場にいるものでは不可能なんだ」

まじかよ！

ハンターハンターの世界では普通だと思うんだが？

「が、君が攻めには瞬間。今までミソラちゃんの全力を避けていたとは思えないほどスキができたんだ。そのためミソラちゃんも避けたり、防御したりすると思ってうった正拳突きがクリーンヒットしてしまった」

ぐ、攻撃は苦手なんだよ。

「あの試合での怪我は僕の監督責任もある。本当にすまなかった」

「いえいえ。避けられなかった俺も悪いですから。気にしないでください。命に別状はありませんし」

命は無事だしな。

俺ももっと鍛えないとな。

「あ、そつだ。ミソラちゃんは今どうしてますか？」

先生は苦笑いをした。

「はあ、実は・・・君気絶する前に何をしたか覚えてる？」

気絶する前？

俺何かしたっけ？

・・・あ！

「ミソラちゃんの顔面にゲロを吐きました！」

三話「私に全てを注いで!」コップ（後書き）

修正

なしい↓らしい

四話「これ以上はいかせない！」モザイク（前書き）

嬉しい><

お気に入り数がすごい！

超嬉しい！！

四話「これ以上はいかせない！」モザイク

四話「これ以上はいかせない！」モザイク

「ミソラちゃんの顔面にゲロを吐きました！」

思い出した。俺はミソラちゃんの正拳突きに耐え切れず口から朝食と胃液をミソラちゃんの顔にプレゼントしたんだ。

「君の掛けたものを洗い落とすために道場のお風呂に入っているよ」

そうなんだ、、
あとで謝りに行かないとな。

「今日はもう帰りなさい。色々あって疲れたでしょう?」

確かに腹部は痛むし体がだるい。

「そうさせてもらいます。ミソラちゃんに謝りたいんですけど、、」

「なら明日道場に来るといい。九時にミソラちゃんも来るはずだから」

こうして俺の道場入門一日目は終わった。

得たもの：疲労、正拳突き。

失ったもの：体力、ミソラちゃんの好感度、お腹の中の朝食、胃液。

次の日俺はミソラちゃんに謝るべく道場に来ていた。
正直、来たくなかった。

ゲロを顔面にぶっ掛けた女の子に会うのだ。かなり会いにくい。

ミソラちゃんが俺に好意を抱いていたら彼女は変態さんだ。
普通は俺のことが嫌いになっている。

俺のことが嫌いな女の子と今から会う。

・・・考えれば考えるほど鬱になる。

やっぱり植物はいいな。
何も話さないし。

現実逃避をしていると先生に話しかけられた。

「リヨウ君？大丈夫？すごい顔してるけど」

「大丈夫です。俺は間違いなく嫌われています。」

「いや、僕が聞いているのは体調のことなんだけど・・・それにそんなに嫌われていないと思うよ？」

「体調？体は大丈夫ですが心は複雑骨折してますよ」

先生は苦笑いをしている。

嫌われていない？そんな戯言信じるか！

「あんな可愛い子の変態さんなはずないでしょう！」

「変態さん？会話が成立していないよ！？」

「ゲロを掛けられ興奮する、、変態以外の何者でもないですよ」

「彼女にそんな性癖はないぞリョウ君！」

先生とこんな馬鹿な話をしていると

いつの間にかミソラちゃんの来る時間になっていた。

「そろそろミソラちゃんが来る頃だね」

噂をすれば何とやら

道場の扉が開かれるとそこには六歳の女の子が立っていた。

金髪蒼目の美少女。ミソラちゃんだ。

「こんにちは先生。」

先生に挨拶したあと俺の方を見ると目を背け、下を向いてしまった。

お互い無言。

一分、二分、五分、、、

十分は無言だったと思う。
その後も

「「あの「

「「ぶいぞ」「

無言

「「その「

「「お先にぶいぞ」「

つばし無言

「「あの「

」「どづぞ」「

の繰り返し。

まったく話が続かない。

こうなったら・・・

東洋の神秘土下座。を使用しながら

」「本当にすいませんでした!!」「」

声が重なった。よく見るとミソラちゃんも土下座している。
この世界にも土下座が存在するとは・・・

あれ？ミソラちゃんがなんで俺に謝るの？

「何でミソラちゃんが俺に謝るの？」

「へ？だってリヨウ君を気絶させたのは私だし。リヨウ君こそなん
で私に謝るの？」

「・・・だってゲロを掛けちゃたから」

「返り血とか浴びなれてるから平気だよ？ゲロくらい」

「返り血！？なんで？」

「うちの家は猟師なの。私も週に一度、猟を手伝ってるんだ。」

「・・・意外な反応。」

俺的には「ゲロ男、二度と私に顔を見せないで！このクソが」と言
われると思っていたんだが

「・・・よかった。嫌われてなくて。」

先生の方を見ると笑いながらウィンクしてきた。
多分こうなることを予想していたんだろう。

「ゲロ掛けられて興奮とかしないよね？」

「あたり前でしょ！私のこと何だと思ってたの！？」

四話「これ以上はいかせない！」モザイク（後書き）

四話は微妙でしたね、、
文字数少ないし。ゲロゲロ言い過ぎました。
暫くは自重します。

緊急公募

題名、募集します。
ネタがなくなってきました。

五話「身の程を知れ！雑魚どもが！」釣竿（前書き）

題名はライトさんに考えていただきました。

日刊ランキング12位！嬉しい！！
目指せ！ベスト10入り

五話「身の程を知れ！雑魚どもが！」釣竿

五話「身の程を知れ！雑魚どもが！」

前日、ミソラちゃんは俺の事を嫌っておらず、変態さんでもなかったことがわかり俺は一安心していた。

上機嫌な俺はスキップしながら道場に向かっていた。

今日から本格的な拳法の授業に入る。

ドキドキ、ワクワク。昨日は興奮してあまり眠れなかった。

どんな授業なんだろう？楽しみだな

道場に着くとミソラちゃんが出迎えてくれた。

「おはようリョウ君！」

「おはようミソラちゃん！」

彼女は、はじめ会った時は暗い感じだったけど
今ではかなりフランクに接してくれる。
やはり、ゲ○事件のおかげだろうか？

「今日からリヨウ君も本格的な授業なんだね」

「うん！どんな授業か楽しみだよ」

最近、言動や行動が子供っぽい気がする。
精神が肉体に引っ張られているのかな？
それとも、ただ単に俺の精神が子供なだけか。

「あのーあんまり期待しないほうが・・・」

「どうして？」

期待しないほうがいい？
どうして？だってこの道場はあの心源流拳法の道場だろ？

「一応、私はこの道場でも最高クラスの使い手です。私と同等、もしくはそれ以上の力を現時点で持っているリヨウさんにはあまり必要ないかと。」

・・・でもね。

「俺、攻撃は完全素人レベルなんだよ？」

あ、ミソラちゃんが忘れてた！という表情になった。

「・・・そうでしたね。リヨウさんは攻撃に転じると急にスキが増えるんです。そのことを完全に忘れてました。リヨウさん、あなたはまだ強くなるんですか、恐ろしい才能ですね。」

「・・・俺に才能は無いよ。」

今のままじゃ全然駄目だ。成長スピードが遅すぎる。
キルアやゴンに完全に劣る。

あれ？今って原作の前なんだろうか？
もう原作は始まっているのか？
重要なことを忘れていた、、

まあ、それはさておき

「もっと鍛えないと。今のままじゃ駄目なんだ。」

「・・・リヨウさんは一体なにと闘うつもりなんですか？今のリヨウさんでも並みの大人なら殺せると思いますよ」

殺人鬼や盗賊団や殺し屋や危険生物とです！
勝つ、、とまではいかなくても殺されないだけの実力がほしいです。

「そろそろ道場に入ろうよミソラちゃん」

「そうですね。もうすぐ授業が始まってしまいますね。」

話を強引に切り上げて俺とミソラちゃんは道場に入った。

この道場には毎日決まった流れがある。
まず初めに軽い運動や体操をして、
基本的な型の練習、突き、蹴りの練習。
そのあとは組み手。
最後に先生からの評価タイム。

こんな感じだ。

型の練習は大変なためになった。
きちんとした拳法の動きを学べるのはかなりプラスになる。

問題は組み手だ。

手加減が難しいのだ。

俺が全力を出すと（俺とミソラちゃんが組み手する時の相手は大人。）

みんな怪我をしてしまうのだ。

そして現在先生からの評価タイムです。
ついに俺の番。少し緊張する。

「リョウ君」

「はい。」

「君の体の性能はすごい。才能もかなりある。体が育ってくればそれなりの使い手になるだろう。しかし、君はその性能に頼りすぎている。今のままでは最高クラスの使い手にはなれないだろう。格闘の駆け引きやフェイントが下手糞すぎるんだ。戦闘経験も足りていない。」

「・・・はい。」

結構辛口だな。

でも的を射ている。確かに俺は今の体の性能に頼りすぎている。駆け引き、フェイントか。

しかし戦闘経験はこの道場で得るのは無理だな。ここにいる大人じゃ弱すぎて勝負にならない。

うーん。

どこかに戦闘経験を得られる場所ないかな？

（命の危険がない場所）
実践は危険すぎるしな・・・

まあ、暫くの間は基本の型の練習に専念しよう。

六話「そんなに大きいの入らないわ」カバン（前書き）

伏線の張り方が下手糞すぎました。

この後の展開普通にばれてます・・・

それにもつと文章書く練習しないなあ。

読み直してみると至る所で矛盾を発見。

今回の題名は「よんよん」さんの考えたものを使わせていただきました。

六話「そんなに大きいの入らないわ」カバン

六話「そんなに大きいの入らないわ」カバン

俺が道場に通り始めて三年の月日が過ぎ去った。

早朝は土いじり、朝は体作りのためのトレーニング、昼からは道場で型や闘い方を学び、夜になると死んだように眠る。
毎日こんな生活を続けていた。

道場に入ればすぐに強くなれる！と俺は思っていたのだが
入門一ヶ月目で壁にぶち当たった。

俺の身体能力の才能は先生曰くかなりあるらしく百万人に一人の逸材らしい。

ただ、問題は攻撃センスの才能だ。
壊滅的なまでにセンスがない。先生曰く一千万人に一人の逸材らしい。

（悪い意味で。）

どんなに模擬戦をしようと、拳法の基礎的な動きを体に叩き込もうが戦闘になると体がそれを発揮してくれないのだ。

人を殴るという事にかなり抵抗がある。

殴ったら死んでしまうのではないか？

大怪我をさせてしまうのではないか？

そんな不安が脳裏に出てきてしまうのだ。

防御、回避、体力などではゴンやキルアに対抗できると思う。
しかし、攻撃となるとズシにすら勝てる気がしない。

俺はこの三年間、如何にかして攻撃のセンスを磨こうと努力した。

拳を振るのが怖いなら剣にしてみてもどうか？

と思い剣術を先生に習ったが結局戦闘になると相手に刀を振り下ろせない。

（剣を持つことすら怖い。）

俺にはクワの方が似合っている。

近距離攻撃がダメなら遠距離攻撃にすればいいのでは？

と思い弓を先生に習ったが戦闘になるとどうしても矢を相手にむかって放てない。

先生は過去になにかトラウマになることはなかったか？と聞かれたがなにも思い当たることはない。

前世では格闘技経験はない。人を殺したこともない。

俺は何が恐いんだろうか？

・・・どうせ俺がチキンなだけだろうな。仕方ないだろ！

八年前までは喧嘩すらしたことのない一般市民だぞ！？急に人を殴れるか！

結局この三年間でわかった事は俺の攻撃の才能は皆無だということ。

そして先生が出した結論は
「あなたは筋金入りの臆病者です。マトモな方法では直らないでしょう。少しの間此処に行つて来なさい。危険ですが、まあ何とかなるでしょう。」

・・・と。

みなさんもうわかつているだろうが俺が今から行くのは「天空闘技場」です

ええ、あの原作に登場した、念とお金と怪我満載の天空闘技場ですよ。

命がいくつあつても足りないよ、、
二百階には絶対に行きたくない。

俺はまだ念を知らないので裸で戦いの洗礼を受けなくてはいけない。そのため体の一部を失ってしまう。嫌だ。

しかし鬼の先生は

「二百階で一度でも勝てるまでは帰つてこないでくださいね」と。

遠まわしに念を覚えろと？

先生は念を使えるのか？だったら教えてくれよ。
念があればこんなに苦労しなくていいのに。

落ち込んでいると先生はさらに追い討ちをかけてきた。

「あ、ミソラちゃんも経験を積みさせるために同伴させましょうか！」

あなたは八歳児と九歳児を格闘技の聖地にぶち込むんですか。
スパルタ過ぎるでしょ。

ミソラちゃん！あなたも少しは何か反論を！

「リョウくんを一緒なら何処でも行きますよ。彼と一緒にいると面白いですし」
ミソラちゃんにはにっこりと笑いながらそう言った。

・・・べ、別に惚れてなんていないんだからね！勘違いしないでよね！

すいません。

気持ち悪かったですね。

でも仕方ないですよ、不可抗力ですよ！

彼女、この三年で子供から美少女に進化したんですよ。

強くて優しい金髪蒼目の美少女。

その彼女が俺に優しく話しかけてくれたり、にっこり笑ってくれるんですよ！惚れても仕方ないでしょう？

告白？

無理だよそんなの。

俺は臆病で捻くれた黒髪黒目ですよ。
しかも出会い頭にゲロをプレゼント。
女の子のパンチ一発でノックアウト。

・・・勝ち目がなさ過ぎる。

おつと話がズレた。

とりあえずまとめよう。

俺には攻撃のセンスがない。（ミソラちゃん・先生クラスに絶対勝てない）

道場ではセンスを磨くには役不足（みんな弱いので。）

俺は天空闘技場へ行くことになった。

二百階で一勝するまで帰れない。

二百階で勝つためには念は必要不可欠なので覚えなければならない。

二百階で一勝か、、、

数年は掛かるだろうな。

この道場にも来れないんだな。

俺に拳法にイロハを教えてくれたこの道場にはやっぱり愛着があるな。

先生とも会えないのかあ。

俺の恩師だもんな。

暫くの間お別れだ。

「じゃあな、ウイング先生！行ってくる」

こうして俺とミノラちゃんは道場を少し離れることにした。

六話「そんなに大きいの入らないわ」カバン（後書き）

眠い、

少し寝ます。

色々補足、お礼、感想のお返事などは少し待ってください。

三時間、三時間だけ・・・

七話「貴様の力はそんなものか！」握力測定器（前書き）

昨日投稿できなかった……

打ち上げでハシヤギすぎて更新する暇がなかったんですスイマセン。
目がショボショボする、、

誤字、脱字がありましたら教えてくれると嬉しいです。

七話「貴様の力はそんなものか！」 握力測定器

七話「貴様の力はそんなものか！」 握力測定器

俺とミソラちゃんは近くの飛行場で飛行船に乗り込み約三日かけて天空闘技場のある町へとやって来た。この町は有名な歓楽街であり、町の中心部に位置する天空闘技場がシンボルとなっている。

天空闘技場は格闘技の聖地であり。全251階、高さはなんと991mで世界で4番目に高い建物だ。

参加者はまず試験をうけ、その実力に応じて1〜50階へと振り分けられる。一勝すれば10階上に上がり、一敗すると10階下にさがる。試合をするとファイトマネーがもらえ上の階に行くほど高くなっていく。また上に進むと個室が用意されたり選手の待遇が良くなっていく。

200階以降ではファイトマネーがなくなり名誉のみの戦いとなる。ここには念能力者しかおらず、入るには（洗礼）を受ける必要がある。

天空闘技場の説明は以上だ。

……飛行船にあったパンフレットに書いてあったことを言うただけです。

あ、念のことはパンフレットに書いていないよ。原作知識、原作知識。

念には秘蔵義務？ があったはず。200階の解説の人や観客も何

が起きたよくわからないっぽい。

「リョウ君！ ボーとしてないで選手登録するよ」

は！

ミソラちゃんに話しかけられて我に返る。

俺たちは今、天空闘技場の選手登録をするために受付に来たのだが受付前に、長蛇の列出来ていたので回想していたのだ。

お、ついに俺たちの番だ。

「こんにちは……選手登録ですか？」

受付のお姉さんの笑顔が引きつった。

まあ普通は8、9歳の子供が格闘技の試合に参加しようとしてるんだビックリだよな

「はい、そうです」

「で、ではこの用紙にお名前、年齢、性別、出身地、格闘技歴、誓約書を記入してください。」

ええ〜と。

名前：リヨウ・スーズキ

年齢：八歳

性別：男

出身地：マルク村

格闘技歴：五歳から心源流拳法を習ってました。

誓約書：「怪我、死亡しても天空闘技場は一切責任を負いませんがよろしいですか？」

「YES on NO」

YESにマルをつけてっと……

これでいいかな？

「これでいいですか？」

「はい。問題ないです。ではあちらの闘技場へ行ってください。どの階から始めるかのテストをさせていただきます。」

テストかあ恐いな。

俺の力は何処まで通用するんだろうか？

ミソラちゃんも受付終わったようだし行こうかな。

「じゃあ行こうか、ミソラちゃん」

「はい。あ、あまり心配しなくても大丈夫だと思いますよ」

「ありがとう。ミソラちゃん頑張ろうか！」

「はい！ 私たちの力見せ付けてやりましょう！」

リョウリョウにしてやんよ！

…… すいませんネタに走りすぎました。

どうやら俺の相手は筋肉たるまのようです。

身長は180m弱くらい、筋肉ムキムキのハゲです。

正直あんまり強くなさそうです。

「餓鬼、怪我したくなかったら棄権しな！ ここは子供の来ている場所じゃないんだよ」

雑魚のテンプレな台詞ありがとうございます！

小物臭がプンプンするぞ。勝てそうな気がしてきました。

「審判。早く始めてください」

審判、オロオロしてないで早く開始してくれよ。

「し、試合開始！」

やっと始まったか。

あれ？俺道場の以外と闘うの初めてじゃないか。
デビュー戦！？

「行くぜええええええええええええええええ！」

ちよつとまてよハゲ！

人が考えごとしてる時に……

「五月蠅い」

ハゲの腹に正拳突きをブチ込む。
ゴホオと小物臭のする泣き声をだしてハゲは倒れた。

「し、勝者リヨウ・スーズキイ」

雑魚！？

こんなに弱いのか？

なんでハゲは正面から殴りかかってきたのか？
馬鹿なのか？死ぬのか？

「き、君は50階へ行ってください」

ミソラちゃんは何階になったのかな？

「お疲れ様ですリョウさん」

噂をすればミソラちゃん

「お疲れ、どうだった？」

「雑魚過ぎます一発で沈みました。リョウさんは？」

「同じ感想だよ。何階になった？ 俺は50階だよ」

「私も50階です」

これならすぐに200階に行けるな。

余裕、余裕。

なんて思っていた俺は近いうちに痛い目にあう事になる。
あのウイング先生がそんな簡単な課題出すわけないだろ俺！
もっと早く気づいていれば……

七話「貴様の力はそんなものか！」握力測定器（後書き）

「伏線」

作詞：白 作曲：白

伏線　♪ 伏線　♪

張り方間違えると転んじゃうよ　♪

イタ　イタ　い　♪

ネタが古いとフルボッコ　♪

感想、構想、予想はボロボロ　♪

ダメだし酷いと泣いちゃうヨ　♪

あんまり叩かないでえ　ヨ　♪

作者の涙がポロポロ　♪ 目がテンにい　♪

この歌は汚点にい　♪

感想の良い点を見て昇天　♪

テンションおかしいです。

スイマセン。

指摘を受けて修正。

八話「もう限界なの」表面張力（前書き）

今回の題名も「よんよん」さんのものを使わせていただきました。
よんよんさん本当にありがとうございます。

ネタが……ない

八話「もう限界なの」表面張力

八話「もう限界なの」表面張力

俺とミソラちゃんが天空闘技場に来てから一週間がたった。

現在俺とミソラちゃんのクラスは150階になっていた。

ファイトマネーもかなりの額だ。

俺の預金通帳にはもう一億も入っていた。八歳児が持っていていい金額じゃない。

金には困らないので今は高級ホテルに泊まっている。

……言っておくがミソラちゃんとは違う部屋だぞ！

今までの敵は弱かったからなあ……

今まで一敗もしていないので天空闘技場内での俺とミソラちゃんの評判はすごいことになっている。

しかし、今日の俺の相手はかなり強いらしい。

かなりのベテランで勝率はそんなに高くはないがかなりの実力者らしい。

まあ、かるく捻り潰してやるか

「じゃあ行ってくるよミソラちゃん」

「頑張つてね！ リヨウ君」

隣の部屋のミソラちゃんに挨拶をしてから試合会場に向かう。

今日の相手、サマ・ロングネスはもう試合会場に着いていた。
しかも準備運動をしていた。真面目か！

「遅いぞクソ餓鬼。五分前行動、学校で習つたろ？」

「厳つい顔で五分前行動で……」

見た目と中身が一致してないぞ。

「人の気にしてる事言いやがって！ 社会の厳しさ教えてやるぜ」

「やれるものならやってみな」

俺が負けるわけないだろ。

最強オリ主、リヨウ様だぜ！？

「試合開始」

ゴングが会場に鳴り響く。

速攻で決めてやんよ

開始早々、正面から突っ込んできやがった。
素人じゃないか

「オラアアアアア」

「余裕、余裕」

動きに無駄がありすぎるぜ。
フェイントも素人レベルだ。

「無駄無駄無駄アアアア」

相手の攻撃は俺に掠りもしない。
この試合はもらったな。

「クソ餓鬼、身体能力は高いようだが武術の駆け引きはお子様レベルだな」

「何だと！？ 雑魚の癖に！」

生意気だな、雑魚の癖に！
一発で沈めてやんよ

「死ねやあああああ」

「馬鹿が！」

な！カウンター！？
そんな馬鹿な！？今の右ストレートは今の俺に出せる最速最強の一発なのに

「グオオオ」

クソ、顔に一発入れられた。
だが、そこまで威力はない……ん？

「！！」

「餓鬼、お前の負けだぜ」

なんだ？

顔が痛い、熱い、痺れている。
威力は低かったのに……意識が……

「試合終了、勝者サマ・ロングネス選手」

八話「もう限界なの」表面張力（後書き）

主人公のキャラが違いすぎた、、

でも、大人を何人も倒して多額のお金ゲットしたら天狗になるはず！
口調とは行動とか変わっちゃうはず！

……僕ならそうなりますね

九話「そんなに激しく突いちゃめえ!」ビリヤード

九話「そんなに激しく突いちゃめえ!」

知らない天「気がついた?」

言わせてほしかったな…

一度は言ってみたい台詞だったのに

俺は病院のベットらしきものに寝かされていた。

腕には点滴が打たれている。

大事な事だからもう一度言うが知らない天「リョウ君?」

「うん、問題ない」

「怪我の方は大丈夫?」

怪我、、、

あ、顔にパンチ直撃したんだっけ?

まだ、若干ジンジするな

「微妙。まだ少し痛む」

何でこんなに痛いんだ？

威力はそこまで高くは、、、

！ 念か？

200階以上は念能力者しかないが、

199階以下に念応力者がいないわけじゃない。

「お医者さんは原因不明の怪我だって……大丈夫？心配」

「鏡あるかな？怪我がどうなってるか見たいんだ」

「はい。これ」

俺の顔を見てみると拳の模様のドス黒い痣ができていた。
物凄くグロテスクだ。

やっぱり念能力っぱいな。勘だけど。

「ミソラちゃん頼みがあるんだけどいいかな？」

「何？」

「相手の選手、サマさんを探してほしいんだ」

「あ、実はその人からリヨウ君宛てに手紙を預かってるんだ」

そう言ってミソラちゃんは一通の手紙を差し出してきた。
なんだろう？

……罵倒や文句か？

手紙の内容を要約するとこんな感じだ。

「お前超弱い。強くなりたかったら此処に来い。来れば怪我也治してやるぞ」

怪しい、、

普通、自分が倒した相手にこんな手紙書くか？

しかし、怪我を治す、と言うのは本当ならかなり嬉しい。
唯でさせ不細工なのに顔に大きな黒い痣ができるのはキツいし、この顔を毎朝洗面所で見るのは精神衛生上良くないと思う。

しかも、念能力者なら念を教えて貰いたい。そうすれば裸で洗礼を受けなくて済む。

話が上手すぎるが、、
どうしよう？

「あのー考え中の所申し訳ないんだけど少しいいかな？」

「何？ミソラちゃん」

「さっきウイング先生から電話がきて、自分の知り合いがそつちに
いるから「少し戦い方を教えてもらえ」と」

「……ちなみに知り合いの名前は？」

「えええとサマ・ロングネスさんらしいです」

ウイング先生！俺は今猛烈に感動しています！
始めから可愛い教え子に裸で洗礼を受けさせる気はなかったんですね

「あと先生から伝言で「死ぬなよ」と」

死ぬなよ？何？命の危険があるの！？

俺、当初の目標の「農業しながら平和に生きる」からどんどん遠ざかっていく気が…

しかし！背に腹は代えられない。

仕方ないサマさんの所に行くか、

俺はサマさんの所へ向かうことにした。

手紙に「ミソラちゃんとは同行させるな」と書いてあったので俺一人だけだ。

書かれていた住所を見るとそんなに遠くないようだ。

俺はタクシーに乗り、下記の住所へ向かう。

十分程で目的地へ到着した。

書かれていた住所には古いビルがあった。

扉が開いていたので中に入ってみると男の声が聞こえた。

「良くきたなクソ餓鬼。その部屋に入って待つてろ。」

多分サマさんだ。

俺はおとなしく部屋に入り、中央に置いてある椅子に腰掛けた。三分程するとサマさんが部屋に入ってきた。

「少しは目が覚めたかクソ餓鬼？」

「ええ、俺は自惚れてました」

「ウイングからの手紙には真面目で礼儀正しい餓鬼だと書いてあったんだがな」

「大人相手に無敗で口座に多額の現金が入金されたらだれだってそうなりますよ」

「いくらなんでも変わりすぎじゃないか？ 本当になんがあった？」

「……あんまり話したくないんですけど」

「まあいい」

サマさんはこれ以上検索せず話を切り上げた。
助かった。あの事は俺の黒歴史殿堂入りだ。
そのことについてはその内話そう。

「じゃあ本題に入ってもいいか？」

「はい。」

さて、ここからが本題だ。

「ウイングの奴にお前の修行をつけてと言われたから面倒だがやってやる」

「ありがとうございます」

やっぱり準備してくれてたんだなウイング先生。

この人は先生が頼む位なんだからかなりの実力者なんだろうな。

でも、あんまり強そうに見えないんだよな、ゝゝ、実力隠すのが上手いんだろうな

「ただ、修行をする上でひとつ言っておくぞクソ餓鬼」

「何ですか？」

死んでも文句言うなとか？

死んだほうがマシだと思う特訓をするぞとか？

サマさん見た目熱血系だからな…… 厳しいこと言われそうだ。覚悟を決めないとな。

「俺の素の身体能力や格闘技術はお前以下だ。」

……え？

九話「そんなに激しく突いちゃらめえ!」ビリヤード(後書き)

主人公が急にウザくなった理由は番外編でやろうと思います。

たくさん感想や評価 p t ありがとうございます。
おかげで頑張れます。

修正はい× ぽい○

週間ランキング17位になりました!
嬉しい!

「全てを無に返してくれる」尊（前書き）

久しぶりの更新!!

「全てを無に返してくれる」箒

「全てを無に返してくれる」箒

「もう一度言っただけですか？」

「だから、俺の素の身体能力や格闘技術はお前以下だ」

(・ω・)

……不覚にもこんな顔になってしまった。

八歳の子供に負けているサマさんって一体…

「俺がお前に勝ったのにはきちんとした理由がある」

念！

ついに念公開だ

この世界の一番の魅力

「その理由って？」

わかっているが一応聞く

俺みたいな餓鬼が念を知っているはずないからな

「聞きたいか？」

「はい」

「ホントに聞きたいか？」

「はい」

「ホントにホントに聞きたいのか？」

「はい」

「公開しないな？」

「はい」

うぜえ！

さっさと教えてくれよ

「この世界には 念 と言うものが存在する」

「 念 ですか？」

俺は全力で知らないふりをする

顔がニヤけないようにするのは結構辛い

まあ当然だろう、念さえあれば生き残れる確立が高くなるからな

「ああ、体の精孔という部分からあふれ出る生命エネルギーを自在に操る能力だ」

「サマさん、頭を打ったんですね？今ならまだ間に合います、救急車を呼びましょう」

「黙れクソ餓鬼、俺の頭は正常だ」

信じられない子供の演技をする
こうでもしないと今にも顔に笑みが……

「まあ信じられないのも無理はない、だから実際に使わせてやる」

「え」

そういうとサマさんは俺の精孔を無理やり……開きやがった！！

その瞬間、体から生命エネルギーがあふれ出る。

「その体からあふれでてるのがオーラだ。それを体に止めてみる」

できるか！

だが、今の俺なら出来る気がする。

やってやる！

「おお、出来てきた……なんだそれ？」

え？

何かおかしいことでもありましたか？

「お前のオーラに触れた植物が腐っているんだが……」

「は？」

よく見ると足元に咲いていた花が見事に枯れていた

「まったくふざけた餓鬼だ。念の基礎を覚えずに念能力を作りやがった」

「念能力？」

「ああ、念を使うものの最終段階の技だ」

「……」

「く触れたものを腐らせる能力>みたいだな」

今日、僕はあらゆる課程をふつとばして念能力を得ました

本当にありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6073u/>

農業しながら平和に生きたい

2011年8月12日08時59分発行